

英語絵本の選定とその活用： 国際理解教育のための英語絵本の開発研究から

山崎 友子

はじめに

「絵本の読み聞かせをしたいのですが、どんな本を選んだらいいでしょうか」という質問を受けることが増えてきた。絵本は子どもの発達に極めて有効な教材である(Carr, 2001)ばかりでなく大人にとっても癒しの効果があるとされ(河合他, 2005)、広く注目されてきているところである。英語活動がほとんどの公立小学校で実施され、平成23年度から高学年において必修となった今、英語の絵本の活用はさらに関心を集めるようになってきている。そこで、本論では「絵本を活用した国際理解教育のための教材開発研究(CCUP)」¹により選定した絵本の選定基準と実験校におけるその使用状況をもとに、英語絵本の選定とその活用について考察をする。

絵本の教材としての価値

文化的アイデンティティは小学校高学年で完成すると言われている(箕浦, 1991)。この時期に子どもは自分の所属していない文化集団を異質なものとして認識する。違うものは基本的に人間に警戒心を引き起こすものである。従って、文化の多様性について教材を提供し、「違い」を「多様性」として受けとめる下地を作ることは国際理解を進める上で重要である。小学校という場の特性、すなわち、子どもの発達段階と教師の指導技術という両面から考えて、「絵本の読み聞かせ」はその有効な手法と考えられる。

絵本の教材としての価値として、下記の5点に注目した。

1. 絵本は、ほとんどの日本の小学生になじみのある形式で、なじみのない考えを紹介する楽しく創造的な方法である。先行研究によると、新しい考えはな

¹ 英語名 Cross-Cultural Understanding Using Picture Books (CCUP)。Japan Foundation Center for Global Partnership(CGP) (国際交流基金日米センター) の助成を得て、米国の教育研究機関 Education Development Center (EDC) と共同して、2006年1月～2008年3月まで行った研究。米国で出版された絵本を活用して米国の文化の多様性をもとに国際理解教育のための教材を開発することを目的とした。

じみのある方法で紹介されるとより容易に学び保持することができる (Toyama, 2005, Butzow, 1989)。

2. 絵本の中の絵はそのページの物語を描くだけでなく、異なる文化の複雑なトピックや考えを視覚的に理解することを助けるのに役立つ(Huck, 1997 and Carr, 2001)。
3. 絵本の中の物語は、子ども達に世界を他者の視点で眺める機会を提供する。その結果自分自身についての見方や世界観を深める機会となる(Mendoza and Reese, 2001)。他の文化におけるさまざまな行事などを学び、違いを知るだけでなく、自分自身の経験と関連付けて学ぶことができる。読み聞かせの後の話し合いで、自分の住む共同体の多様性を考えることができる。
4. 絵本の読み聞かせは社会的な体験を共有することになる。子ども達にとって楽しい笑い・悲しみ・興奮などを共有する機会となる。(Ellis and Brewster, 1991)。読み聞かせの後の活動では、安心して新しいことばを体験し、絵本から学んだ新しい考えを探索することができる (Tabors, 1999)。
5. 絵本の中の物語は子ども達の想像力を使うよい練習となる。このような創造的体験の上に、さらに子どもの創造的な力と自己表現の能力を開発するために読み聞かせの後の活動を設定することができる(Ellis and Brewster, 1991, Toyama, 2005)。

読み聞かせ活動は教師の回りに子ども達が座って行われることが多い。絵本を介して、教室の中に教師と子ども達が共有する時が生まれているのが見て取れる。このようななじみのある形式で想像力を働かせ新しい世界に足を踏み入れるという学びは、「教え込み」とは異なるタイプの学びの場面である。絵本は一度読んでおしまいではない。「もう一回読んで」ということばが表すように、学びが深ければ深いほどもう一度読みたくなるものである。学校教育においても教材として大きな価値を有している。

国際理解教育の教材としての絵本の選択基準と選択結果

CCUP 研究において、内容・言語・絵・形式の4つの観点で下記の基準・副基準を設けた。それぞれの重要性については、4人の共同研究者 (Tan, Alejandra, Sood, and Yamazaki) の平均値を用いた。

表 1. CCUP における絵本の選択基準

Criteria Items	Value
	%
A: Content	
Accurate representation (in content) of the culture / gender / roles <ul style="list-style-type: none"> - Avoid stereotypes <ul style="list-style-type: none"> - Is the language representative of what is spoken in the target culture? (inclusion depending on whether or not the word/phrase is crucial to the culture) - Does the story give any information about life in the target culture? - Does it contain any obscure cultural references that may be difficult to understand? - Is it too culture specific? 	11.6
Interesting and Age-appropriate <ul style="list-style-type: none"> - Does it have universal themes (e.g. Family, school etc.) that would help students connect and relate to the story? - Does the story contain animals, magic or other themes that are of interest to children of the target age group? - Does it contain moving and emotional stories? - Is the content of the story age appropriate? Note: An interesting story would be amusing, arouse curiosity, memorable, develop their imagination and appeal to their sense of humor.	11.6
Politically Correct Does the story deliver a positive image of the target culture?	10.3
Content relevant (school subject) Does the book provide a learning potential for other subjects?	7.1
Message/ Moral/ Values	9.7

Does the story deliver a positive message?	
B. Language	
<p>Text</p> <ul style="list-style-type: none"> - Is the language level appropriate? Not too easy? Not too difficult? Is it clear? (no slang, minimum foreign words) - Is the English level appropriate for teachers to be able to translate it if needed? - Is the amount of text appropriate? (not text heavy) 	11.6
<p>Repeated language / predictable language / pattern</p> <ul style="list-style-type: none"> - Does the story contain any features such as rhyme, onomatopoeia, rhythm or intonation that pupils will enjoy imitating and listening to? - Is there any natural repetition to encourage participation in the text and to provide pattern practice, pronunciation practice, to recycle language items and develop memory skills? - Does the repetition allow pupils to predict what is coming next in the story and to build up their confidence? 	8.4
C. Illustration	
<p>Quality of illustrations</p> <ul style="list-style-type: none"> - Do the illustrations relate to the text and support the children's understanding? - Are they appropriate to the age of the pupils? - Are they attractive and colorful? - Are they big enough for all the class to see? 	11.0
<p>Accurate representation (in illustration) of the culture / gender / roles</p> <ul style="list-style-type: none"> - Do they depict life and people in the target culture accurately? 	10.3
D. Format	

<p>Layout</p> <ul style="list-style-type: none"> - Is the layout of the text and supporting illustrations reader friendly? - Does the color contrast make it easier to read? - Does the sequence of images and the content of the story flow well together? - Do images capture the main aspects of the story? 	7.7
--	-----

(国際交流基金への CCUP 申請書より)

この基準をもとに、CCUP における学習の焦点である民族の多様性に留意し絵本を選択した。選択した 15 冊の絵本には 15 以上の異なる民族的背景を持つ登場人物が登場する。タイプ別に分けると (1) 物語性のあるもの 10 編、(2) 事物の紹介・説明的なもの 4 編、(3) ライムを踏んだ音声を楽しむもの 1 編である。物語性のあるものをエリスとブルースター (2008) の分類に従って分類すると、①動物が主人公として出てくる物語 3 編、②日常生活に基づいた物語 1 編、③結末が予測できるようにストーリーが展開していく物語 3 編、④自国の文化・歴史に由来するもの 8 編 (うち地理 1 編、伝記 1 編)、⑤本文が与えられていない絵物語 1 編、⑥空想的な物語 1 編 (重複あり) である。語学教育でしばしば活用される *Brown Bear* のような「ライムが次から次へと伝染していくような物語」や国語教育で活用される「子ども達がすでになじんでいるおとぎ話」は選択しなかった。選択した絵本のタイトルとタイプを表 2 に示す。

表 2. 国際理解教育のために選択された絵本のタイトルとタイプ

1. *Yoko* by Rosemary Wells 『ヨーコ』
タイプ: (1) ①③④ 民族的背景: 日系アメリカ人他
2. *The Goat in the Rugby* by Geraldine 『やぎのジェラルディーンとラグ』
タイプ: (3) ①④ 民族的背景: ネイティブ・アメリカン
3. *The Story of the Statue of Liberty* by Betsy and Giulio Maestro 『自由の女神像のお話し』
タイプ: (2) 民族的背景: アメリカ人とフランス人
4. *Nana Upstairs & Nana Downstairs* by Tomie dePaola 『2 階のナナと 1 階のナナ』
タイプ: (1) ② 民族的背景: ヒスパニック
5. *Too Many Tamales* by Gary Soto 『タマーレはもうおなか一杯』

- タイプ：(1) ③④ 民族的背景：メキシコ系アメリカ人
6. *Tulip Sees America* by Cynthia Rylant & Lisa Desimini 『チューリップのアメリカ横断旅行』
タイプ：(3) ④ 民族的背景：田舎に住むアメリカ人
7. *The World Turns Round and Round* by Nicki Weiss 『まわる、まわる、世界はまわる』
タイプ：(2) 民族的背景：メキシコ・インド・日本・エジプト・ハイチ・ベトナム・ケニヤ・ロシア・米国
8. *Happy Birthday, Martin Luther King* by Jean Marzollo 『マーチン・ルーサー・キング・ジュニア牧師、お誕生日おめでとう！』
タイプ：(1) ④ 民族的背景：アフリカ系アメリカ人
9. *My First Thanksgiving* by Tomie dePaola 『はじめての感謝祭』
タイプ：(1) ④ 民族的背景：ネイティブ・アメリカン、ピルグリム・ファザーズ
10. *Corduroy's Best Halloween Ever!* by Don Freeman 『コーデュロイの最高のハロウィーン』
タイプ：(1) ①③④ 民族的背景：小熊などの動物
11. *Covered Wagons, Bumpy Trails* by Velra Kay 『ほろ馬車、でこぼこ道を行く』
タイプ：(1) ④ 民族性：開拓時代のアングロサクソン系アメリカ人
12. *Let's Jump Rope and Let's Play Hopscotch* by Sarah Hughes 『石蹴りしよう』『縄跳びしよう』
タイプ：(2) 民族的背景：米国の小学生
13. *Charlie Parker Played be bop* by Chris Rashka 『チャーリー・パーカー、ビーバップを演奏する』
タイプ：(3) 民族的背景：アフリカ系アメリカ人
14. *Parade Day* by Bob Barner 『パレードの日』
タイプ：(2) 民族的背景：アイルランド系アメリカ人、メキシコ系アメリカ人、独立時のアメリカ人、ネイティブ・アメリカン、ピルグリム・ファザーズ
15. *Sector 7* by David Wiesner 『セクター7』
タイプ：(1) ⑤⑥ 民族的背景：米国の都会の小学生

授業実践に用いられた絵本と授業構成

2006年6月から11月の間に、選択された絵本を使って国際理解教育のための授業を実際に構想し実践していただいた公立小学校の授業を絵本選択の分析対象とする。協力を仰いだのは、16小学校、教員29名で、22回の授業が行われた。授業は単元を構成してではなく1回限りのものとして実践された。

表3 授業実践に用いられた絵本

絵本名	授業の回数
<i>Yoko</i>	6
<i>Corduroy's Best Halloween Ever!</i>	6
<i>Covered Wagons, Bumpy Trails</i>	2
<i>My First Thanksgiving</i>	2
<i>Parade Day, The World Turns Round and Round, Happy Birthday MLK, Let's Jump Rope and Let's Play Hopscotch</i>	各1
すべての絵本を同時に活用	1

Yoko と *Corduroy's Best Halloween Ever!* (以下 *Corduroy* と略す) の選択が際立って多い。*Yoko* は、寿司弁当を持っていったヨーコが「変なものを食べている」といじめられるが、それをきっかけに友人ができるという話である。*Corduroy* は、テディ・ベアのコーデュロイが仮装用の衣装が破れてしまったパピーに自分のを譲ってあげたものの自分の衣装をどうするか悩むが、トリック・オア・トリートに出かける直前に見事なアイデアで完璧な衣装を作り上げるという友情あふれる話である。

Yoko を選択した理由として8名中5名の教師から「食べ物」が子ども達の関心をひく話題であり、異文化を知る切り口として取り扱いやすいことが挙げられ、2名が「いじめ」という話題に注目し、他の時間(道徳)でも類似した話が取り上げられていること、主人公が愛らしく子ども達と同年齢であり共感しやすいことが挙げられた (Hall, 2007)。*Corduroy* は6件の授業実践がすべて10月から11月1日までに実施されており、日本の子ども達にもなじみが深くなってきた祭りである「ハロウィーン」の紹介として選択されている。また、どちらも動物が主人公である点も共通している。登場人物の絵がかわいらしく描かれていることもポイントとして挙げられた。授業を実践する教師の絵本選択の基準として、話題(切り口)や登場人物の設定が子ども達を引きつけること、そのことによりテーマが理解されやすくなることが重要な要素であると考えられている。

また、両者ともに「結末が予測できるようにストーリーが展開していく」タイプの絵本である。*Yoko*の授業には「食べ物」から異文化を紹介しようとするものと「いじめ」を共通の課題として考えさせようとするものがあった。後者の授業の中に、ヨーコがからかわれて一人ぼつんと教室の隅に座るところで読み聞かせを止めた授業があった。子ども達は、そこで終わるはずがないと声を上げ、続きを読んでほしいと懇願するが、教師の「なぜいじめたのか・いじめられたのか考えてみよう」というディスカッションへの誘いに引き込まれ活発に意見が出された。*Corduroy*にもペーパーが破れた衣装を手に泣きながらコーデロイのところに来たとき、子ども達自身も自分だったらどのように対応するかを考えさせられるところが山場となる。このようなストーリーの展開であると、子どもに予測という認知活動を行わせたり、感情移入・共感という情意的側面を大切にしたりと教師が読み聞かせの技術を十分に発揮しながら、テーマについてのディスカッションを深める授業を構想することが容易になる。*Yoko*と*Corduroy*が好まれた理由として、国語教育における読み聞かせの授業展開、道徳の授業におけるディスカッションの実施など、教師のもっている授業技術を活用できるということも選択の背景にあると考えられる。読み聞かせの活動以外に、教師用ガイドではゲームやロール・プレイなどの学習者参加型活動も紹介されているが、これらを取り上げた授業はハロウィーンのapple bobbing(りんご釣り)など極少数であった。このことも、すでに教師がもっている授業技術を基本として絵本の選択がなされていることを示すものである。

絵本の選択は、子どもが何に関心を持つか、どのように理解するのが容易であるかという子ども側の要因により子ども理解の上でなされるとともに、教師がその絵本をもとにどのような授業を構想できるかという教師側の要因にも基づいてなされている。

今後に向けて

教材の選択は教師の指導理念を反映する。日々の授業は暗黙のうちにいくつかの指導理念に貫かれて実践され、授業技術・授業の構想力・子ども理解の力が高められていく。絵本は豊かな教材となる可能性を持つが、教師の授業技術等と結びついて授業が構想できなければ絵本は「素材」にとどまり「教材」とはならない。では、どんな絵本を選択するといいたろうか。「読み聞かせ」という小学校の先生の優れた授業技術を活用するには、できるだけストーリー性のある絵本がいいということになる。さらに教師自身が新境地を切り開き、さまざまな絵本を教室で楽しむには、何らかの支援が必要である。絵本がなぜ教材として優れている

のか。それは、「新しい考えはなじみのある方法で紹介されるとより容易に学び保持することができる」からであった。であれば、教師にとっても、新しい指導方法はなじみのある方法で紹介されるとよいということになる。なじみのある方法の一つに「同僚から学ぶ」ということがある。CCUPの協力校のうち何校かでは、日本人の先生方が2名、あるいは4名でティーム・ティーチング(TT)を行われた。一緒に授業を行う中で、ディスカッションやグループ・ワークの進め方、読み聞かせの上手な仕方など得意な先生から学ぶことができよう。TTを行う中で、新しい指導方法を試してみようという気運が生まれることも期待したい。そうすれば、ストーリー性のある絵本に限らずさまざまな絵本を活用できる。

英語の原書の絵本には英語文化の香りが漂っている。しかし、英語の専門家ではない小学校の先生には気づきにくい。Yokoでは、黄色いスクール・バス(スクール・バスは他の色ではなく黄色である)や教室など絵に米国の学校文化を見ることができる。先生がどのように教室を飾っているかなど興味深い。ことばの上では、ヨーコをいじめるフランク兄弟の名前は家族として複数形で **the Franks** と紹介されているが、彼らの好物のソーセージも **Boston franks** と紹介され、ことばの遊びがあり笑い出すところである。“**hug**”が「抱きしめる」という意味であることはわかるが、誰がどのようなときにするのが自然なのかは簡単ではない。このような異文化に関わる知識が充実したガイドが支援としてあるとよい。しかし、たとえガイドで説明されていてもそれは「知識」にとどまり、授業として構成するだけの自信にはつながりにくいのも事実である。特に、異文化に関わる知識・理解には「体験」が大変大きな意味を持つ。ALTの派遣時には、授業だけでなく先生と交流する時間がより多く持たれることが望まれる。

CCUPは国際理解教育のための教材開発研究であり、英語の絵本であっても英語で読むことが絶対に必要というわけではなく、日本語訳も準備した。しかし、英語での読み聞かせを行った授業は9件あった。絵本には豊かな文脈の中で語彙が提示されることや重要な語彙・文法構造が自然な形で繰り返されるという特徴があり、英語活動で使用することはこれからますます注目される場所である。CCUPで分析・考察された絵本の選択と活用のあり方に付け加えて、英語絵本の中で使われている語彙・文法構造を活動に取り入れることは可能であり、岩手大学教育学部附属小学校と共同研究を始めたところである。多くの先生や子ども達に楽しく英語と異なる文化にふれる機会を提供できれば幸いである。

謝辞

CCUPにご協力いただいた二戸市教育委員会、盛岡市教育委員会、奥州市教育委員会、そして授業実践をしていただいた各地区の小学校の先生方に心より感謝申し上げます。研究の上で貴重な資料とさせていただいたばかりでなく、熱意あふれる教育の現場に触れる機会となり充実したときを持つことができました。

参考文献

- エリス, G・J.ブルースター. 松香洋子監訳. 2008.『小学校英語「読み聞かせ」ガイドブック 先生、英語のお話を聞かせて!』東京:玉川大学出版部
- 河合隼雄・松居直・柳田邦男. 2005.『絵本の力』東京:岩波書店.
- 箕浦康子. 1991.『子供の異文化体験』東京:思索社.
- 山崎友子, James Hall. 2007. Cross-cultural Understanding Using Picture Books (CCUP).
<http://www.englisheducation.iwate-u.ac.jp/Hall/ccup.html>
- Carr, K. S., Buchanan, D. L., Wentz, J. B., Weiss, M. L., & Brant, K. J. (2001). Not just for primary grades: a bibliography of picture books for secondary content teachers. *Journal of Adolescent & Adult Literacy*, 45(2), 146-153.
- Ellis, G., & Brewster, J. (1991). *The Storytelling Handbook for Primary Teachers*. London: Penguin Books.
- Ellis, G., & Brewster, J. (1991). *The Storytelling Handbook for Primary Teachers*. London: Penguin Books.
- Hall, James. (2007). Selecting and using English picture books in Japanese elementary schools. In *JALT 2007 Conference Proceedings*. Tokyo: JALT.
- Shiohita, Joy. (1997). Beyond Good Intentions: Selecting Multicultural Literature. In *Children's Advocate* newsmagazine. Action Alliance for Children.
- Toyama, S. (2005). The power of picture books. Retrieved June 29, 2005, from http://www.oup.com/elt/teachersclub/articles/picture_books?cc=gb